

戦後日本における児童書出版の特徴

: 国立国会図書館所蔵児童書データの分析を中心に

汐崎順子(慶應義塾大学 非常勤講師)【shio-js@slis.keio.ac.jp】

1. 研究の背景と目的

戦後、日本では子どもの読書環境の充実をめざして、様々な取り組みが行われてきた。子どもを主たる読者とする児童書の出版と普及は、子どもの読書に影響を与える重要な要素であり、特有の動きがあると考えられる。

小西は戦後の児童書出版は、学校図書館への販路拡大、読書推進を目的とした児童書普及の活動、高度経済成長などを背景に成長し、1970年代から1980年代の半ばにかけて興隆の時代を迎えたと述べている¹⁾。

以降は、初版部数の減少と重版頻度の低下など、出版の深刻化²⁾が問題視されるようになった。その原因としては、子どもの本離れと活字離れ、マルチメディアの時代の到来、少子化、バブル経済崩壊後の不況に伴う出版不況³⁾などがあげられている。

出版者の今村は、児童書の商品特性は“息の長いロングセラー”²⁾と述べ、戦後の児童書ベストセラー59冊のリストをあげた。松居は、児童書の特殊性であるロングセラーを重視する編集の姿勢を述べている³⁾。

出版に関する量的データとしては、『出版年鑑』に掲載される新刊出版の統計が広く用いられている。ここからは、児童書の出版点数の推移、全体における割合などを経年で追うことは可能である。例えば1990年代～2000年代に児童書は、概ね全体の5～6%で推移している。2005年は5,064点(全体78,304点の6.5%)と、数の上では最多であった。昨2008年は、4,746点(全体78,013点の6.1%)であったことが分かる⁴⁾。

しかし、これら新刊として出版された児童書の詳細な内訳や推移、児童書特有の動きなどは明らかではない。戦後の出版動向や先にあげた児童書のロングセラー性を実証的に検証した研究も存在しない。

本研究では、国立国会図書館所蔵の児童書データに注目した。国立国会図書館は、国内刊行物を網羅的に収集する納本図書館である。児童書の整理と提供、目録整備の

遅れなどが問題視された時代もあったが^{5),6)}、現在はNDL-OPACで全データが閲覧できる。現時点で入手可能な児童書データ中、最も網羅性と一貫性が高いといえる。

本研究はこの国立国会図書館が所蔵する児童書データの分析を中心に、戦後の児童書出版の特徴を明らかにすることを目的とする。研究課題は以下のとおりである。

- 1) 戦後の児童書出版の動向と特徴を、量的側面から明らかにする。
- 2) 児童書のロングセラー性を一般書との比較から検証する。

2. 研究の方法

2.1 国立国会図書館の児童書データ

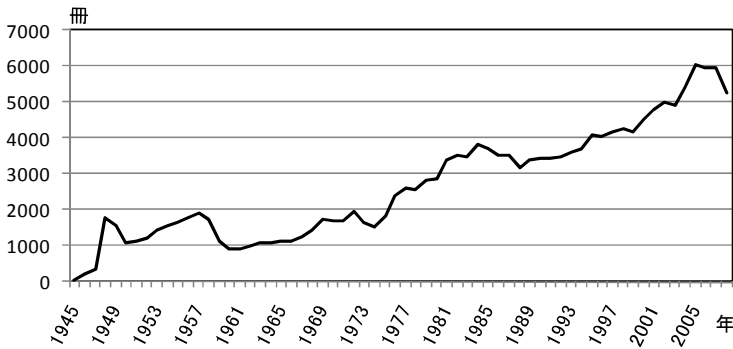
国立国会図書館では児童書を“おおむね十八歳以下の者が主たる利用者として想定される図書”(国立国会図書館法第二十二條第一項)と規定している。現在児童書には、NDLC分類中の「Y1」～「Y18」が付与されている(「Y4」,「Y10」は不使用)。現行NDLC分類が付与されたのは1959年1月以降であり、その後分類方針が変更された部分もある。1959年以前に収集された児童書には、「児」とNDC分類を組み合わせた分類が付与されていた。この分類の遡及的な修正はなされていないため、児童書の分類体系は2通りに分かれている^{6),7)}。

2.2 データのダウンロードと整備

2009年5月にNDL-OPACから出版年が1945～2008年の児童書(和図書)のデータ約173,000件をダウンロードした。ここからノイズデータ(重複,異分類,データ不備等)を除去した結果、標本数は171,767件となった。以下この標本を「NDL児童書データベース」と呼ぶ。第1図では、1945年から2008年の児童書の数の推移を示す。

なおこの「NDL児童書データベース」の網羅性を確認するため、『出版年鑑』掲載の児童書のカバー率を調査した。対象としたのは『出版年鑑2001年版』⁸⁾に掲載された

第1図 国立国会図書館所蔵児童書点数の推移: 1945-2008



児童書(2000年の新刊)のうち、ISBNが付与されていた2,936点である。ISBNレベルでは2,694点(91.8%)が「NDL児童書データベース」のデータと一致した。

2.3 出版動向の調査

【分析対象とする標本の抽出】

上記の「NDL児童書データベース」を構成している児童書は、国立国会図書館に納本された図書である。市販されない出版物(各自治体の発行物、自費出版物など)も含まれるため、純粋に戦後の児童書出版の全体像を示すものではない。加えて分類記号、分類方針が変更されている。このため詳細な分析を目的として、全体の約1/100にあたる1,700件のデータを無作為抽出した。以下この標本を「1,700_sample」と呼ぶ。

【新分類、コード付与と分析】

抽出したデータには、新たな分類とコードの付与を行った。分類はNDC分類を基本とする大田区立図書館児童分類表のNDC二桁部分までを採用した(非流通の図書は分類の際に区別)。さらに名作、昔話、キャラクターもの、言語区分など、独自のコードを付与した。これらの結果を単純集計とクロス集計で整理、分析した。

2.4 ロングセラー性の調査

【分析対象とする標本の抽出】

ロングセラー性を検証するため、「NDL児童書データベース」から1955, 1965, 1975, 1985, 1995年の出版年のデータ各100件、計500件を無作為抽出した。次にNDL-OPACか

ら同出版年、同数の一般書(和図書)のデータを無作為抽出した(双方とも非流通の出版物は除外)。

【ウェブ調査、結果の比較と分析】

上記の標本1,000件(児童書と一般書各500件)の入手可能性をamazon.comで調査した。

amazon.comの選択理由は、部分的な調査をJUNKU堂、丸善のサイトでも行った結果、最も「在庫有」の件数が多かったためである。

「入手可能」とは、「在庫有」、「取り寄せ」、「一時的に在庫切」のものとした。異版がある場合は、原則として著者(翻訳は訳者、絵本は画家も)と出版社が一致すれば検索対象とした。入手可能であったデータには新たに分類を付与し、児童書と一般書の内容を比較し、分析した。

3. 結果と考察

3.1 児童書の出版動向

【類別、年代別の児童書数】

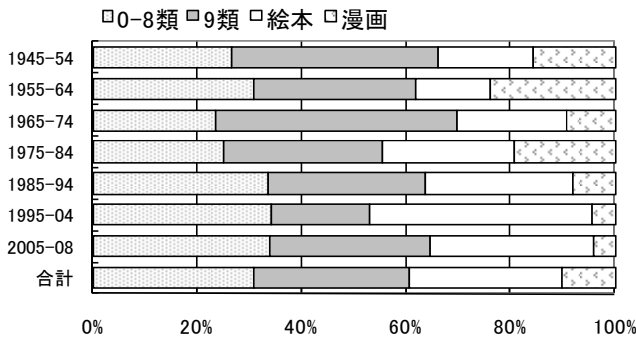
「1,700_sample」における児童書の類別の点数を1945年から10年単位(2005-8年は4年)の年代別に第1表に示す。非流通分とした図書は65点であった。これは地方自治体などの児童関係資料の制作、自費出版の動向を示す要素だが、今回はこの65点を除外した1,635点を対象に分析を行った。

全体(1,635点)における割合は、0~8類505点(30.9%)、9類(90に分類した「詩」20点も含む)484点(29.6%)、絵本479点(29.3%)、漫画167点(10.2%)であった。9類と絵本が占める割合の高さが分かる。

第2図では0~8類をノンフィクション分野としてまとめ、設定した各年代における割合の推移を示す。9類では1965-74年(46.1%)、絵本では1995-2004年(42.4%)の

第1表 年代別・類別にみた児童書の点数

	0類	1類	2類	3類	4類	5類	6類	7類	8類	9類	絵本	漫画	非流通	合計
1945-54	2	2	9	0	12	0	0	2	2	43	20	17	0	109
1955-64	2	1	19	0	9	1	0	6	1	39	18	30	2	128
1965-74	1	2	7	5	13	1	0	6	1	70	32	14	5	157
1975-84	1	1	13	3	18	5	1	21	2	78	65	50	6	264
1985-94	0	7	17	9	39	9	0	32	4	105	98	28	13	361
1995-04	1	6	25	23	33	5	4	34	7	76	171	18	26	429
2005-08	0	2	8	16	19	6	1	22	7	73	75	10	13	252
合計	7	21	98	56	143	27	6	123	24	484	479	167	65	1,700



第2図 年代別にみた各分野における児童書の割合

割合が最も高い。またこの1995-2004年以降は、9類より絵本の割合が高くなっている。児童書は文学と絵本を中心に出版されてきたこと、文学が先行した後に絵本が点数をのばしたことが分かる。1995-2004年の絵本の割合の高さ、文学の割合の低下についてはさらに細かく検証する必要がある。

漫画では1955-64年の割合(23.8%)が高い。これは1950年代後半の傾向として彌吉が指摘した娯楽文化の拡がり⁹⁾と一致する。

ノンフィクション分野の割合が全体の30%を超えるのは、1955-64年と1985年以降である。分類別にみると、ゲームや遊び(60点)、動物(43点)、伝記(41点)、地理(34点)、工作(30点)、科学(28点)が多い。

1955-64年の動きには当時の道徳教育、科学教育への関心の高さ⁹⁾との関連が考えられる。最も割合が高い1995-2004年(34.2%)には、総合的な学習の開始(2002年)の影響が考えられる。この年代を分類別にみると、ゲームや遊び(23点)、伝記(11点)、地理、動物、学校生活(各10点)が多い。

【名作、昔話、キャラクターものの出版】

第2表では、内外の名作、昔話、テレビのキャラクターを扱った作品の各年代における数と割合を示す。戦後30年間の名作

第2表 年代別にみた名作・昔話・キャラクター作品の点数と割合

	名作		昔話		キャラクター	
	点数	割合	点数	割合	点数	割合
1945-54	14	12.8%	7	6.4%	0	0.0%
1955-64	23	18.3%	3	2.4%	0	0.0%
1965-74	23	15.1%	5	3.3%	2	1.3%
1975-84	14	5.4%	17	6.6%	13	5.0%
1985-94	15	4.3%	14	4.0%	33	9.5%
1995-04	9	2.2%	16	4.0%	44	10.9%
2005-08	3	1.3%	7	2.9%	10	4.2%
合計	101	6.2%	69	4.2%	102	6.2%

の割合の高さが特徴的である。1975年以降にはテレビの影響が見られる。昔話は各年代一定の割合で出版されている。

【翻訳と絵本、児童文学】

第3表では、各年代の児童書全体、児童文学(ここでは「詩」20点を除いた464点)、絵本の3区分における翻訳書の割合を示す。

各年代を通して児童文学と絵本の翻訳の割合が高い。また全体に占める児童文学と絵本の点数が多いため、結果として全体の翻訳の割合を引き上げている。

年代別に見ると、児童文学は1955-64年の割合(61.5%)が最も高い。絵本は次の1965-74年の割合(37.5%)が最も高く、児童文学も前年代に次ぐ高い割合(58.0%)である。この10年間は両分野における翻訳の最盛期であり、海外の作品を積極的に紹介する動きがあったことが分かる。

3.2 ロングセラー性の検証

【児童書と一般書の比較】

調査では児童書は77点、一般書は49点が入手可能であった。第4表では、各年の詳細を分類別に示す。1955年はともに1点だが、1965年、1975年の児童書の入手可能性は、それぞれ一般書の3倍、2.8倍だった。以降1985年、1995年と年代が新しくなるほど両者の差は小さくなっている。

第3表 年代別にみた全体・児童文学・絵本における翻訳作品の点数と割合

	全体				児童文学				絵本			
	日本語	翻訳	合計	翻訳%	日本語	翻訳	合計	翻訳%	日本語	翻訳	合計	翻訳%
1945-54	87	22	109	20.2%	29	13	42	31.0%	15	5	20	25.0%
1955-64	93	33	126	26.2%	15	24	39	61.5%	16	2	18	11.1%
1965-74	96	56	152	36.8%	29	40	69	58.0%	20	12	32	37.5%
1975-84	212	46	258	17.8%	45	27	72	37.5%	48	17	65	26.2%
1985-94	273	75	348	21.6%	67	33	100	33.0%	65	33	98	33.7%
1995-04	321	82	403	20.3%	51	22	73	30.1%	120	51	171	29.8%
2005-08	178	61	239	25.5%	43	26	69	37.7%	52	23	75	30.7%
合計	1,260	375	1,635	22.9%	279	185	464	39.9%	336	143	479	29.9%

第4表 年代別・分野別にみたロングセラーの点数

	一般書			児童書				
	0-8類	文学	合計	0-8類	文学	絵本	漫画	合計
1955	0	1	1	0	1	0	0	1
1965	0	2	2	1	5	0	0	6
1975	2	3	5	3	6	4	1	14
1985	7	3	10	5	5	5	2	17
1995	27	4	31	9	17	12	1	39
合計	36	13	49	18	34	21	4	77

分類別にみると、児童書では全年代を通じて文学と絵本の割合が高い。一方で一般書では児童書よりも0~8類の割合が高く、特に1985年以降にその傾向が顕著である。この分野(0~8類)の図書は年の経過に伴って淘汰されることが予想される。

4. まとめ

「1,700_sample」の分析からは、戦後の各年代を通じた文学と絵本の割合の高さ、児童文学と絵本の翻訳の割合の高さが明らかとなった。日本の児童書出版は、読み物を主流とし、海外の作品を広く受け入れてきたといえる。児童文学と絵本の割合を年代順に比較した結果、戦後の約50年間は児童文学に、現在は絵本に出版の力点がおかれていることが分かった。各時代における教育的な視点、メディアの変化の影響も推察された。より詳細な検証が必要である。

児童書のロングセラー性の高さも明らかとなった。1965年、1975年の一般書との差から、このロングセラー性は、出版後30年以上のものに顕著に現れると考えられる。

「NDL児童書データベース」の1995年~2008年の出版点数上位10社の点数と割合は、71,249点(41.5%)、20社では91,991点(53.6%)であった。出版点数という面からみた場合、これら上位出版社の傾向が全体に与える影響の大きさは自明である。

一方、ロングセラー77点の出版社は1~10点まで37社に分かれた。全体で1位であった講談社が最多であり、上記の上位20社のうち16社が含まれたが、順位はかなり異なっていた。それ以外の21社の出版点数は合計で31点であった。

出版活動には、良書普及という文化的な側面と利潤追求という商業的な側面の両面がある。ロングセラーの本が「子どもに読

み継がれる内容の本」であるならば、「話題の本」、「今、一過的に売れる本」よりも「ロングセラーとなり得る本」をめざす出版、編集者の姿勢が反映される。単純に各出版社の出版点数の多さでは図れない。これが、今回のロングセラー調査の結果にみられた出版社の分散の一要因と考える。

今回は、戦後の児童書出版の動きを各年の出版数という面から明らかにした。しかしこれは児童書出版の一側面であり、どの児童書がどれだけ普及し、読まれているかを示すものではない。児童書の出版が子ども読書に与える影響を考察するためには、出版後の実質的な普及度を明らかにする必要がある。これを目的としたロングセラー本に関する店頭調査や出版者への聞き取り調査、読書推進の各団体、図書館、学校等と出版者の関係の調査など、多面的な調査と検証が今後の課題である。

【謝辞】

本研究は、科学研究費補助金(基盤研究(C))「公立図書館における児童サービスの意義及び理念の総合的研究」の一部です。データ整備と分析にご協力頂いた慶應義塾大学の宮田洋輔氏に感謝の意を表します。

【注・引用文献】

- 1) 小西正保. “児童書出版の現状：失われた読者の回復を”. 年報こどもの図書館 1998年版. 日本図書館協会. 1998. p255-257.
- 2) 今村正樹. 児童書出版は、戦後どのように成長してきたか. ず・ぼん. 2006. No.16. p12-31.
- 3) 福音館書店編. 編集とは何か. 藤原書店. 2004. 237p.
- 4) 出版年鑑 2009: 資料・名簿編. 出版ニュース社. 2009.
- 5) 田中久徳. 国立国会図書館所蔵児童資料の概要. こどもの図書館. 1991. Vol.38. No.9. p2-3.
- 6) 石川春江他. アメリカ議会図書館および国立国会図書館における児童書. 図書館研究シリーズ. 1968. No.12. p119-134.
- 7) 千代由利. “国際子ども図書館で児童文学(ファンタジー)を調べる”. 平成16年度国際子ども図書館児童文学連続講座講義録「ファンタジーの誕生と発展」. 国立国会図書館国際子ども図書館. 2005. p95-136.
- 8) 出版年鑑 2001: 目録編. 出版ニュース社. 2001
- 9) 彌吉光長. “社会の動きと児童図書館: 1956・57年”. 年報こどもの図書館 1958年版. 児童図書館研究会. 1958. p1-4.